IOJだより　第６６号　2013年4月4日発行

NPO法人-IOJ
日本の将来を考える会
http://ioj-japan.com/xoops/

立川断層誤認があぶり出した「規制委員会・有識者会合」の信用失墜

－読売オンライン、産経新聞、朝日新聞を読んで－

去る3月28日に、「立川断層誤認について」東大地震研究所佐藤比呂志教授の記者会見が行われました。
あらためて言うまでもないことですが、今、運転休止中の原発の下に次々と活断層が見つかり、運転再稼働の足かせとなっています。当の佐藤教授は、東北電力東通原発の敷地内調査のメンバーです。有識者会合の拙速な結論が大きな問題となっている状況を考えると、同会合の信用失墜問題につながります。島崎・有識者会合はやはりそうだったのかと思わざるを得ません。これはおろそかに出来ない問題です。 IOJだより66号では、この信用失墜問題に関連する「立川断層誤認」を取り上げ、読売、産経、朝日三紙の報道を比較してみました。

プロジェクト概要
文部科学省では、平成24年度から、「立川断層帯の重点的な調査観測」（受託先：東京大学地震研究所、研究代表者：佐藤比呂志）を実施しています。立川断層帯については、震源断層の形状については不明な点が多く、また長期評価に重要な活動履歴の信頼性は低いとされ、過去の活動時期についてさらに精度良く絞り込む必要があります。また、断層帯の走向から相当程度あると想定される横ずれ成分の平均的なずれの速度は全く不明です。さらに想定震源域が人口稠密地に位置することから、より精度の高い強震動予測が必要になります。こうした背景から、本プロジェクトでは、立川断層帯で発生する地震の規模の予測、発生時期の長期評価、強震動評価の高度化に資することを目的とした研究を行います。自然地震観測・地殻構造調査・変動地形および古地震調査・強震動予測など、総合的な調査研究が、3カ年にわたって実施されます。

その１．読売新聞オンラインの報道（3月28日付）
＜一種の催眠術に 立川断層の誤り、おわびの教授・・・＞

「混乱を与え申し訳ない」。人工物を岩石と取り違えるなどのミスが明らかになった立川断層帯の掘削調査。２８日記者会見で研究者はおわびの言葉を繰り返した。立川断層帯の地質構造を見誤った佐藤比呂志・東京大学地震研究所教授は、会見で謝罪の言葉を重ねた。佐藤教授とともに現場調査にあたった石山達也同研究所助教も「住民、社会に混乱を与えたことを申し訳なく思う」と頭を下げた。誤りの原因について、佐藤教授は「断層を予想していた場所に人工物があった」とした上で、「バイアス（先入観）があったと思う」と厳しい表情を浮かべた。佐藤教授は東北電力東通原子力発電所の敷地内断層調査にもかかわっており、調査チームは今年2013年2月「活断層の可能性が高い」との報告書をまとめている。辞任の意向を問われ、佐藤教授は「資質がないので辞めろというなら職を辞したいと思うが、引き受けた限り、研究者として責任は全うしたい」と述べた。」（以上引用終わり）

１.この件は、見学者に指摘されコンクリート成分と判明したために誤りが露見しました。ですから①コンクリートが非常に古く、その成分が地中拡散していたら、または②指摘がなかったら、判明しなかった。従って「全く運良く」間違いが判明しただけです。

２.間違いは地層表面いわゆる露頭（やけ）での判断ミスです。露頭でさえ間違いをおこしたのですから、地中部分の評価は困難をきわめることが容易に推測されます。地中反射波の分析では、いくつかある可能性の一つを示唆する程度しか判断できないでしょう。

３.以上からもわかりますが、断層学は判断できることと、できそうもないことを自ら厳しく峻別すべきです。そしてできることだけに絞って判断すべきで、わからないことは「わからない」というべきでしょう。

４.この学者の非論理性は、辞任の意向を問われたときの回答にもみられます。「（他者から）辞めろと言われる場合は辞めたい」ということは責任を感じ多いに恥じ入っていると認めています。それなのに「（今般間違いを犯したが）引き受けたからには、（今後も同様の間違いを犯すかも知れないが）責任を全うしたい」ということでしょうか。

その２．産経新聞（3月29日付）
＜見たいものが見えてしまった 佐藤教授一問一答＞

翌２９日の産経新聞（立川断層誤認 見たいものが見えてしまった 佐藤教授 一問一答について）によると、立川断層帯の事実誤認について記者会見した佐藤比呂志教授の主な一問一答は次の通りです。

質問１：誤認の原因は？
回答１：「研究者は何年もかけて調査計画を立てる。（断層を）見つけたいという強い思いがバイアスになって、『見たいものが見えてしまった』ということだ」
質問２：発表方法の問題点は？
回答２：「調査の途中経過は通常は一般公開しないが、今回は最新の知見を発表した。結果的に拙速といわれても仕方がない。ただ、オープンに議論を戦わせることで正しい結論を導くのが自然科学の手法。どの段階で、どんな広報がよかったのかは今も分からない」
質問３：東北電力東通原発の活断層評価への影響は？
回答３：「今回の誤りで活断層の評価は信用できないと短絡的に決めつけるのはよくない。東通原発の活断層評価は今回とは全く異なり、自信を持っている」（以上引用終わり）

回答１について：「見たいものが見えてしまう」ことは実は日常茶飯のことです。脳の特性からして生存にとって一番適しているからです。視界に入った映像すべてを脳が認知することはなく、強く意識したり警戒したりするものに対して脳はいわば過剰反応することで、それに強く集中して、例えば「外敵に早く気づこう」としているわけです。これが裏目にでて、強く期待したものが見える気がしたということだったのでしょう。しかし、いやしくも学者なら、そういう脳の基本的性向、この場合「弱点」を知ったうえで、自己の行う観察や判断を厳格に検証し誤認がないことを確認しながら堅実に研究をすすめるもの

でしょう。それを排除できなければ、学者Aと学者Bが同じものをみても結論は異なりうる訳で、それは再現性が無いことを意味し、学問とはいえないのです。この学者は研究の基本条件すら具備していなかった、と吐露しているのに等しいのです。
回答２について：「オープンに議論を戦わせることで正しい結論を導くのが自然科学の手法。」この考えはまっとうですが、「東通原発の活断層評価」で結論を出す前に、どこでオープンな議論を戦わせたのでしょうか。オープンな議論は身内だけの内輪の相談ではありません。「判断根拠とその過程を国民、各種学会、大学の他学科につまびらかにして堂々と説明し、あらゆる質問に答える責任」がオープンな議論です。そのような厳しい審査を乗り越えてこそ学問として認知されるのです。
回答３について：信用は確実に失墜してしまったのです。それをちゃんと自覚してほしい。この発言はあたかも今回が「例外的な間違い」のように思わせようとしていますが、まだ本件だけが「例外的な間違い」なのか、今まで「全てが間違い」だったのか、まだ判明してはいないのです。それを「全て信用できないと決めつけるな」と先回りし居丈高に言うのは非論理的です。こういう非論理的に話を展開されると、本業においても同様の非論理的展開をしている可能性を感じざるをえません。「東通原発の活断層評価は今回とは全く異なり自信を持っている」なら、あらゆる質問に答え、あらゆる議論に応じる義務が自動的に生じます。それができなければ、辞任以外に方法はないでしょう。

「見たいものが見えてしまった」

立川断層帯の事実誤認について記者会見した佐藤比呂志教授―写真―の主な一問一答は次の通り。

――誤認の原因は

「研究者は何年もかけて調査計画を立てる。（断層を）見つけたいという強い思いがバイアスになって、『見たいものが見えてしまった』ということだ」・・・・

佐藤教授・一問一答

・・・・結果的に無理といわれても仕方がない。ただ、オープンに議論を戦わせることで正しい結論を導くのが自然科学の手法。どの段階で、どんな広報がよかったのかは今も分からない」

――原子力規制委員会の調査団メンバーに加わった東北電力東通原発の活断層評価への影響は

「今回の誤りで活断層の評価は信用できないと短絡的に決めつけ

その３．立川断層誤認 朝日朝刊（3月29日付）
＜活断層 難しい判別＞
予想に似た地形、思い込み、という副題で掲載されました。話の筋は以下の通りです。
１.調査途中で推察を述べたことで混乱を招いた
予想した構造がまさに出てきたため誤認し、十分検証しないまま途中段階の見解を報道や見学会で公表していた。
２.一般公開で指摘を受けたことが契機
土木関係の見学者から「人工物に見える」と指摘された
３.天然の地形でも活断層かどうかの判定は難しい。断層と似た地形は別の原因でできることもあるので。複数の手法による確認が必要だが、研究者で見方が異なることはよくある。いろいろな手法での総合判断が必要。
４.調査を進めながら議論を重ねて真実に近づけていくので、今回の調査も科学の方法論としては問題ない。
５.ミスを認めて発表したことは勇気がある。
６.東通原発の断層は見解かわらず。
５人の専門家が「活断層である可能性が高い」との見解で一致している。
１.について：専門家の中に土木関係者はいないのですから、結局誰も気づかず、誤認のまま最終発表されたであろう、と考えるのが普通でしょう。
２.について：一人の、学者でもない、単なる見学者の、いってみれば「ちょいと見」の違和感から発した軽いコメントが契機ということから、専門家の威信が（素人の前に）まったく喪失したのだという危機感をもたなくてはいけないのです。
３.について：この論旨がぐらついた愚痴っぽい表現からは「活断層は多数決でも決めないとどうにもならない難問だ」と白状しているように受け取れます。最終意見がたとえ一致しても、各々の専門家の見解の根拠は全く異なっていた可能性があり、いってみれば呉越同舟的な判断を超えていないと考えられます。というのも一人の専門家の見解内容を他の専門家は賛同していないのですから。
６.を先にしますが：東通原発の断層評価に関し①複数の手法による確認を当然行ったはずですが、なん通りのどういう評価手法を実施したのか、その結果は各々どうだったのか。②土木など他学会の見識が反映されていたのか。③「５人の専門家が活断層の可能性が高いとの見解で一致。」といっていますが、それは「一致」ではありません。「可能性が高い」即ち「黒に近いグレー」というのは幅広いスペクトラムの中に散らばっているというだけでそれぞれ評価の程度は違うでしょう。グラデーションのどのあたりにあるかを不問に付せば「皆、程度の差はあれグレーすなわち可能性が高い」との結論にもっていけるわけです。
４.について：「科学の方法論として問題ない」とのことですが、紆余曲折過多の、他学会を排除しすぎた粗雑な進め方であっても、とにかく多少とも真実に近づけばいいと聞こえます。一般論としてはそういう愚鈍な方法もあるでしょう。しかし、仮にも学者なのですからもっとスマートにやらないと恥ずかしいと感じるべきでしょう。
５.について：後になるほど影響が大きくなるのを恐れ、早めに言っただけのように見えます。それは勇気でなく打算でしょう。「勇気」という言葉を弄んで、事の重大性を隠そうとしてはいけません。

結言：
今回問題となった佐藤比呂志東大地震研教授は、原子力規制委員会の専門家調査団（原子力規制委員会・島崎邦彦委員長代理を団長とする）の一員として、東北電力東通原発の敷地内断層の調査にも加わっています。 この件の評価はともかくとして、今号では、佐藤教授らの立川断層誤認問題とその発表についての、三紙の報道姿勢を取り上げてみました。 今回はからずも三紙を読み比べてみると、その論調がずいぶん異なることに驚きました。いずれも全国紙ですから似たり寄ったりだろうとの先入観がありました。読売と産経は事を淡々と報道しようという姿勢がみえます。そして社の意見をいう場合、はっきり区分けしてわかる書き方をしています。それに比べ、朝日は報道の中に社の見解を巧みに紛れ込ませているような書き方にみえました。社としての意見も今の日本国民全体の感じ方考え方よりも、数十年前のアナクロニズムを感じ郷愁すらおぼえました。 読者諸氏は三紙の報道姿勢を通じ、何を、どう感じとられたでありましょうか。
（T.M記）